

アジアの土

アジア学院からのニュース

9
2025
#200



1974年に創刊した「アジアの土」は、皆様に支えられて今回で200号を迎えました。今号では、その歴史を振り返り、その意義を改めて掘り下げていきます。

アジア学院にとって「アジアの土」とは

佐藤 裕美

募金・国内事業課販売
アジアの土編集委員

アジア学院では、年に4回、機関誌「アジアの土」を発行しています。学院内外からの活動報告、行事やイベントの開催案内を掲載したニュースレターとして、支援者の方や教会、関係のある学校など2000以上の個人や団体に発送しています。「アジアの土」発刊に際し、まず農場や教務、国内事業課など様々な部署から職員が集まり、今いちばんお知らせしたいことは何かを話し合います。その後各ページの執筆担当者や誌面デザイン担当者が編集と校正を重ね、完成された機関誌は多くのボランティアさんとの封詰め作業を経て、日本全国へと配送されます。農作業と同様に、「アジアの土」は協働作業の賜物でもあります。

「アジアの土」を読んで、その内容に共感したから寄付をした等、応援やお励ましのメッセージを頂くことは、とても嬉しいことであり、アジア学院と皆さんをつなぐお手紙であると感じ、感謝にたえません。

今は情報発信の手段としては、紙媒体ではなくインターネットを経由するものに重きが置かれていますが、特集記事がもしもなかったからという理由で機関誌単体を手に取られ、さらに誰かに手渡しして下さったり、お店や学術施設に設置して下さったり、感謝の意を伝える目的でご寄付をいただいた方々のご芳名を掲載するという情報共有の場でもあることを考えると、まだまだその存在意義は十分にあるのかもしれません。アジア学院との出会いや、私たちの理念や活動を深く知るきっかけとしての「アジアの土」は、これからも多くの方の心に届くニュースレターであるよう、みなさんと共に育ち、記録として残っていく媒体であることも心にとめ、引き継がれていくと願っています。

アジアの土 振り返る! 200号の歴史



文
江村 悠子
アジアの土 編集委員
(総務補佐・支援者サポート)

95
1999



以前から充実度を増していた学院内外の人々の紹介記事が、この時代に体系化されていく。95号で、支援者を紹介する「アジア学院応援団指定席」が連載開始。108号(2002年6月)では、学生紹介が「Voice of the Participant」と名付けられており、これがいずれ現在の「Voice アジア学院の住人たち」となる。

VOICE!
元編集者

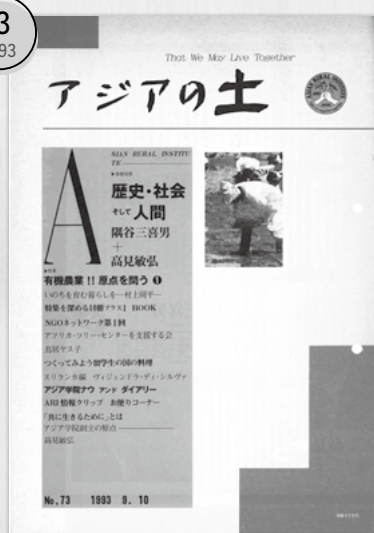
「アジアの土」の主にレイアウトに関わらせていただいたのは94年から99年頃です。当時はパソコンが普及していなかったので、写真植字(写植)を黒磯印刷(株)に打っていただきページを作っていました。私は93年までは東京のデザイン事務所でしたので、とても嬉しくて、つつい凝ったレイアウトにして夜中まで事務所の電力を消費してしまいました。また黒磯印刷さんにも面倒くさい文字詰めなどお願いしてしまい、この場を借りてお詫びいたします。納品されてコイノニアホールで大勢で行なった発送作業は良い交流の機会となりました。

創刊号
1974



創刊号 (1974年6月)

73
1993



大きな転換点となった73号。白黒・B5サイズ・8ページ構成から、2色刷り・A4サイズ・16ページ構成へと変わり、内容もゲストを交えた対談やインタビュー、書評やレシピなど、雑誌と呼んで差し支えない、かなり気合の入った誌面となった。スタイリッシュなカラー時代が117号(2004年9月)まで続いた。

宇野 仰さん
(元アジア学院職員)



学報「アジアの土」創刊

アジア学院が県の認可を得て発足して間もなく、学院の公的機関誌の発行計画と、その名称を県庁に登録する必要がありますがありました。職員会でいくつかの案が出されましたが、「アジアの土」が全員の賛同を得てすんなりと決まったそうです。

アジア学院創設者のひとり、高見敏弘氏はこの命名について「良かったと思います。アジア学院の掲げる幻と使命とを、これほどピッタリと表現する言葉は他にないでしょう」と振り返ります。土は食べものを産み出してすべてのいのちを支えるものであり、アジア学院はアジア、アフリカ、太平洋地域の草の根の農民リーダーの研修を通して土をよみがえらせ、すべてのいのちが共に生きることを目指しているからです。

初期の「アジアの土」で最初に目に飛び込んでくるのは、毎号の巻頭を飾る高見の文章です。ほとんど毎号欠かすことなく、アジアの農村や日本の社会を見つめ、食と命をめぐる世界の動きに警鐘を鳴らしつつ学院の使命を確認する言葉を高見は語ってました。度々の誌面リニューアルに伴って配置が変わっても、書き下ろしから過去の著述・講演からの抜粋に変わってもそれは続き、なんと2010年の139号に至るまで高見の言葉はそこにありました。

その他は「学報」の名の通り、学院にまつわる報告が中心です。研修や寄付についてはもちろんのこと、興味深いのは職員ニュース。海外出張から結婚や交通事故まで、一人ひとりの詳細な情報が支援者に共有されていました。

VOICE!

編集委員



荒川 朋子 (前校長・現常務理事)

編集に携わるようになった経緯は忘れてしまいましたが、おそらく人手不足からであったと思います。当時は、人手の要ることには何でも関わりました。まっさらの用紙に割付を考え、枠内に収まるように原稿の文字を数えては、切ったり増やしたりを繰り返しました。写真を挿入するために縮尺や拡大の倍率を計算機で出しました。全ては手作業でした。一番の思い出は100号記念の際に、元校長の故グレッチェン・デブリース先生に題字を毛筆で書いていただいたことです。私の発案で、私の書いた「お手本」に倣って書いていただきました。先生ははにかみながらも真剣に書いてくださいました。先生の一生に一度の習字であったと思います。題字を見ながら今でもその光景を思い出します。

VOICE!

読者

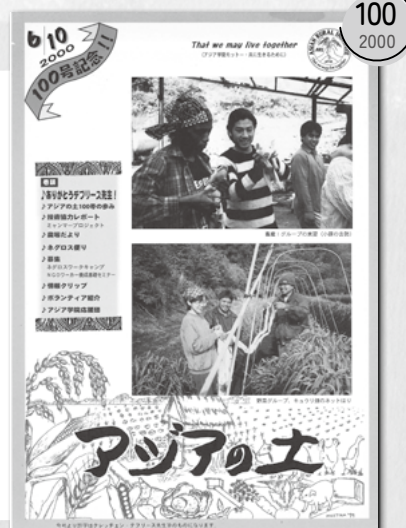


山田 貴司さん
美貴子さん

「アジアの土」200号おめでとうございます。卒業生の帰国後の活動記事からアジア学院の研修成果を知ることができ、掲載の度楽しみです。卒業生を訪問した記事もそれぞれの国の様子を知る事ができ研修の意義の理解が深まります。土づくりを学べるオープナーニングプログラムの紹介は興味深く読みました。なんとと言っても、フードライフの紹介は、学院に訪問して共に楽しく頂いた食事を懐かしく思い起こします。今後の発展をお祈りします。

もっと「アジアの土」!

2010年代以降はFacebook、YouTube、Instagramと学院のSNSアカウントが次々と開設され、学院ウェブサイトも年々充実していききましたが、それにもかかわらず「アジアの土」の存在感は変わっていません。皆様が腰を落ち着けてページを開き、時に学院からの新鮮な問いに、時に温かな風景に出会うことができる、他にない媒体だと信じています。今後もその名に恥じないよう、すべてのいのちが共に生きる礎である「土」をよみがえらせる使命を、ここアジア学院から丁寧に発信していきたいと思っています。



記念の100号で題字が現在のものに



表紙の上半分に写真を置く現在のフォーマットが定番になってくる。



再び白黒へ。裏表紙には「財政難のため」一色刷り(白黒)に戻し、ページ数も10ページに減らす旨が記されている。



号ごとに定めたトピックを特集する現在の形になる。最新情報を提供する一過性のメディアとしての役割を超えて読み物としての価値を高め、受け取る方の関心に応じて過去の号をお渡しすることも可能に。



卒業生紹介が「卒業生 Update」と現在の名称になる。「Voice」と「卒業生 Update」は2大コンテンツとして定着。

人々の
結びつきを
取り戻したい

地元での厳しい困難を乗り越え、
学びと行動で地域を支えるサンブロとサラ。
その歩みと挑戦を紹介します。

2025年度学生 from エスワティニ

Sambulo Sizo Mkhabela

サンブロ・シゾ・ンカベラ

アフリカ教会機構

Organization of African Instituted Churches (OAIC)

教師／インターン

Teacher / Intern

隔たりを埋め、つながりを育む — サンブロの挑戦

サンブロは、自らが問題解決の糸口となることで、自分のコミュニティにおける「隔たりを埋める」ことを心がけて生きてきました。農業とバイオシステム工学を学んだ後は、小規模プロジェクトに重点を置く政府機関に加わりました。そこで彼は、清潔な水の給水計画を立案し、コミュニティに直接的な支援を行いました。当時、高学年のクラスで数学の教師が不足していたため、サンブロはボランティアとして地域の学校で教えることになり、これが、教えることへの情熱を見出すきっかけとなりました。サンブロにとって教えることは、コミュニティに貢献する方法のひとつです。

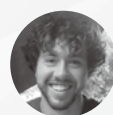
他者を助けたいという性分を持つ彼は、アジア学院で得た多くのアイデアを持ち帰りたいと考えています。例えば、身近にある資源を活用して肥料を作ることによって有機農業を復活させるといったことです。また、学んだ知識を活かしてコミュニティ内に有機農場を作り、農民たちにその技術の重要性を直接伝え、地域で広く有機農業が普及するように支援するつもりです。

アジア学院での研修中、サンブロは自分のコミュニティ内の新たな「隔たり」を認識し始めました。生理用品を売っている唯一の店まで7キロ以上離れている

ことから、彼は自分が得た女性用生理用品などに関する知識をコミュニティに持ち帰りたいと考えています。具体的には、生理用品の作り方を住民に教えたり、学校や、それを必要としている人たちに生理用品を配るために、NGO を設立したり、NGO と提携したりといったことです。

サンブロは、アジア学院で大切にしてきたことと同じようなやり方で、もう一度コミュニティの精神に明かりを灯したいと考えています。互いの精神的な距離を縮め、個人主義にとらわれず、コミュニティ全体をいかに強固なものにしていくかに重点を置くことで、サンブロは周囲の地域に、再び共同体意識を呼び起こしたいと願っています。アジア学院で築いた時間と人間関係を大切にしながら、アジア学院の雛形に倣ってコミュニティを強化し、気づかなかった「隔たり」をもう一度「埋める」ことを希求しつつ。

文



トレバー・ハリバートン
インターン



子どもたちを
支援するための
新たな道を見
つけたい

2025年度学生 from フィリピン

Sarah Michelle Azures Violon

サラ・ミシェル・アゾレス・ヴィオレン

ジャイレ・チルドレンホーム

Jireh Children's Home, Inc.

寮監

House Parent

孤児院から未来へ — サラの使命と成長

虐待やネグレクト（育児放棄）を受けたり、孤児と
なったりした母国・フィリピンの子どもたちへの
サラの努力と献身は、日々の犠牲の上に成り立ってい
ます。

大学卒業と同時に直面した苦難と不安を経て、彼女
は兄の勧めでザンバレスにある孤児院、ジャイレ・チ
ルドレンホームにやってきました。天職を見つけよう
と始めた最初の半年から、あっという間に6年が経ち、
寮監の役割を引き受けることになりました。この肩書
きには、子どもたち一人ひとりの世話や指導、適切な
栄養や医療ケア、教育、精神的な成長を保証するとい
った責任が伴います。また、子どもたちの多くが大きな
苦難を経験していることから、サラの日々の仕事には、
過去のトラウマに苦しむ子どもたちのカウンセリング
も含まれます。母親のような役割を果たしながら、子
どもたちにしかるべき愛情を注ぎできました。

サラのホームでの仕事は、それだけにとどまりませ
ん。ジャイレ・チルドレンホームで過ごした後、子ど
もたちが新たな生き方を発見し、豊かに成長していく
ことが最大の目標だからです。しかしながら、新型コ
ロナの大流行により、ホームの経済的安定が揺るがさ
れ、職員は自給自足を向上させる方法を模索していま

す。このことを念頭に置き、サラはアジア学院に応募
しました。

アジア学院でのサラの主な目標は、寮監として母国
の子どもたちを支援するための新たな方法を見出すこ
とです。生活訓練に重点を置くことで、ジャム作りや
販売、家畜の飼育、「農場から食卓へ」の概念を子ど
もたちに教えるつもりです。さらに高度な技術として、
大工仕事や裁縫、パンやお菓子作り、電気工事なども
教えたいと考えています。仕事目的でも個人的にでも、
より多くの技術を自由に使えるようになれば、ホーム
を出てからもより良い生活を送れる可能性が芽生えま
す。

アジア学院で、サラは授業と並行し、フードライフ
の経験を通じて、より多くの技術や技能を得てきまし
た。これらの学びを経て、有機農業や利用可能な資源
を活用した自立、家畜の世話の仕方といった知識を持
ち帰ることが可能となるでしょう。すべてはホームの
子どもたちにより良く、より明るい未来を示すため
です。サラ自身の言葉を借りれば、「彼ら/彼女らの成功
は私たちの成功でもある」からです。

2000号を記念して、同じ「情報発信者」である
研究科生のヴェーをご紹介します。



2018年度卒業生・2025年度研究科生
Venitta Kaduya
ヴェニータ・カドゥヤ

ゾディアック放送局
Zodiak Broadcasting Station
ラジオプレゼンター／プロデューサー
Radio Presenter, Producer

from マラウイ

ジャーナリストとして、 人々の生活にインパクトを

インタビュー・文



阿部 真希子
募金・国内事業課補佐

マラウイでも指折りのラジオ局、ゾディアック放送局で働くヴェーが、ジャーナリズムの道に進んだ背景には、エンジニアである父親の存在がありました。彼は、幼少期から色々な物の仕組みに興味を持ち、たくさんの質問を投げかける娘を邪険にせず、週末には自分の仕事場に連れていき、一つ一つ丁寧に説明してくれたといいます。ある日、父親は彼女にこう言いました。「語学をよく勉強したら良いジャーナリストになれるよ。いい声をしているし、質問上手だからね！」

ラジオの利点は、農作業や家の仕事をしながらでも気軽に聞けるところにあります。マラウイにもテレビやインターネットがありますが、ラジオの人気は不動で、ラジオが人々の生活に与える影響には驚くべきものがあります。

ある時、ヴェーは地方に住む女性たちの健康問題に関する話題を取り上げました。伝統的な治療師を頼り、家を出産する女性たちが、大量出血などが起きても適切な処置を受けられず、命の危機にさらされている現状を伝えたのです。その放送を聞いたある政治家は、そのような状況を改善することを約束し、見事当選。遠隔地の女性が産前産後に滞在できる施設が病院の近くに建設され、多くの女性が恩恵にあずかりました。

また、ある年は農業の番組で、4カ月 にわたり、落花生の育て方特集しました。実際に地域の農場に足を運び、適切な時期に、農家に種まきや草取り、追い蒔き、そして収穫から保存方法までを伝えたのです。「葉っぱが黄色いからもう収穫できるって？だめだめ、病気かもしれないから、本当に実が成長しているの

か、よく確認しなくちゃ！」時にはドラマ仕立てで、面白おかしくリスナーに訴えかけるこの番組を通して、実際にその年、同地域では、落花生の収量に明らかな増加が見られました。

2018年のアジア学院での学びで、目も心も開かれたヴェーは、勇気を得て、自分のコミュニティに赴き、近所の学校の少女たちに布ナプキンの作り方を教える活動などを行ってきました。研究科生としての研修を終えた後は、義父から受け継いだ土地で農業を始める計画を抱いており、ゆくゆくは人を招いて、作物や畜産に関する研修を行いたいと意気込みます。ラジオでも地域活動でも、彼女の根底にある思いは「人々の生活にインパクトを与えたい」という点に集約されており、それが日々の原動力となっています。

戦後80年

痛みと向き合い

共に生きるとは

文



荒川 治
校長

25年前、アジア学院に赴任して初めての年、学生たちと広島島の原爆資料館を訪れた。そこで私は決して忘れることのできない経験をした。言葉を失うような展示の数々を見学し、被爆者ご本人から直接お話を伺った時、一人のインドネシアの学生が静かに言った。「原爆が落ちたおかげで、私の国は救われた」。私は愕然とした。原爆が「救い」だったという言葉に、胸が締めつけられた。しかしそれは、日本の侵略によって深く傷ついた家族の記憶から出た言葉だった。彼にとって戦争の終結は、命と尊厳の回復を意味していたのだ。

さらに別の学生が、被爆者にこう尋ねた。「あなたは、日本のアジア侵略についてどう思いますか？」その場にいた私は、またしても言葉を失った。だが今思えば、それもまた他者の視点と痛みから生まれた切実な問いだったのだと思う。（それでも私は原爆を正当化することは決してできない。）

この体験を通して、原爆の悲劇も、日本の加害の歴史も、どちらも忘れてはならないと痛感した。記憶を語り合い、互いの視点に耳を傾け、学び合うこと——そこにしか、真の平和への道はない。

私は、戦争に傾く時代の空気や核による抑止を正当化する議論に対して、いのちと尊厳を守る立場から、戦争そのものに反対したい。平和とは、ただ争いが無い状態ではなく、違いや痛みに向き合い、誠実に関係を築くこと。その姿勢こそが、「共に生きる」社会の土台なのだと私は信じている。

★次号、戦後80年特集です

寄付者御芳名

(敬称略・順不同)

集計
期間

2025年6月1日～2025年7月31日

サポーター寄付・ 一般寄付

【青森県】木村 幸子 【秋田県】田中 真 【山形県】宮裡 俊悦 【福島県】杉原 義雄 【茨城県】岩田 朗 金谷 喜一郎 宮崎 昌久 IKE 設計開発事務所 【栃木県】赤羽 正美 阿久津 啓司 鮎瀬 征夫 大久保 允寛 大谷 雅代 大森 貴子 小倉 恭子 川上 聖子 川崎 圭子 菊地 創・ふじ 吉川 宗芳 小中 一成 小山 博子 武智 明美 田中 淳子 丹羽 寿美 羽山 弘一 福本 光夫 McCurley Jonathan 松田 一彦 松本 辰美 八木沢 淳 (教) 足利東教会 (公) 宇都宮聖ヨハネ教会 小山聖泉キリスト教会 (学) さつき幼稚園 (教) 西那須野教会 ヒヤマ種苗店 鹿沼キリスト教会 【群馬県】亀田 瑠子 (教) 渋川教会 【埼玉県】樺澤 幸雄 千村 雅信 細川 敦子 (教) 東所沢教会 【千葉県】太田 賢 佐久間 健 佐藤 伊一郎 関 偉子 多田 万里子 山本 栄子 (教) 天王台教会 ミルトス会 【東京都】栗谷 しのぶ 伊藤 毅史 岩切 勉 江尻 俊章 岸 まち子 木村 利人 久世 陽子 佐柳 信男 嶋 信彦 鈴木 佳子 高野 美恵子 竹野 裕子 竹本 浩 富岡 徹郎 永沼 真理子 賛川 治樹 平岡 昭子 深本 南 麗 治夫 本田 典子 牧 甫 栢田 京子 丸山 正文 向山 功 山根 正彦 渡辺 多恵子 国際基督教大学教会 (学) 国際基督教大学高等学校キリスト教活動委員会 (教) 全国教会婦人会連合中央委員会 箱根 東洋英和女学院中部 宗教委員会 (教) 中目黒教会 (教) 西国分寺教会 (バ) 同) 日本バプテスト同盟 全国女性会 (教) 原宿教会 こどもの礼拝 【神奈川県】荒井 明子 石丸 志賀子 今川 信夫 江坂 宏子 遠藤 道子 金子 尚子 進 宏一 中島 菜々子 樋口 真鈴 福井 敏之 松島 直子 WANG YUTONG (教) 鎌倉雪ノ下教会 横浜祈りの集い 【長野県】青木 栄作 柄澤 真理子 【愛知県】塚田 昇 【京都府】櫻井 鋭子 丸谷 一耕 (特活) 木野環境 【大阪府】大本 和子 山下 紘正 (一社) 背骨コンディショニング協会 (株) ホビーズファクトリー 【兵庫県】今井 真理 黒田 喜久子 森宗 秀敏 八 善恵 【岡山県】岡崎 優子 岡山友の会 【沖縄県】(公) 沖縄教区宮古聖ヤコブ教会 【海外】アジア学院北米後援会 アメリカ福音ルーテル教会 カナダ合同教会 合同メソジスト教会 米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教

書き損じハガキ

一品寄付

【栃木県】赤羽浩子 阿久津啓司 島田美智子 眞木メレディス 松田一彦 【埼玉県】細川敦子 【千葉県】中島佳織 【東京都】石山香世 久山道子 (教) ひばりが丘教会 【神奈川県】堀川浩邦 WE ショップこうほく日吉店 (公社) スコールド家庭教育振興協会 【新潟県】(教) 長岡教会 【大阪府】曽根キリスト教会

【山形県】原田俊二・加矢乃 【栃木県】久保田隆行 杉田万由子 高村京子 谷本伴子 山口秀夫 (教) 四條町教会 【埼玉県】井上久夫 田嶋明子 アリサン 【東京都】小嶋迷夫 山田貴司 (バ) 同) 日本バプテスト同盟全国女性会 【三重県】(学) 愛農学園農業高校

日頃のご支援に心より感謝いたします!

(医) 医療法人 (医社) 医療法人社団 (学) 学校法人 (カ) カトリック (株) 株式会社 (教) 日本基督教団 (キ) 日本キリスト教会 (公) 日本聖公会 (公財) 公益財団法人 (公社) 公益社団法人 (財) 財団法人 (社) 社団法人 (宗) 宗教法人 (特活) 特定非営利活動法人 (バ) 同) 日本バプテスト同盟 (福) 日本福音ルーテル教会 (有) 有限会社

寄付金	6月	17,381,673円
実績状況	7月	5,415,161円
寄付金合計		22,796,834円

寄付金がアジア学院に入金された日に
基づき掲載しております。
入金日は口座振替の場合はご決済の1ヶ月
後、クレジットカードの場合は2ヶ月後です。

寄付金領収書について

口座振替・クレジットカードでご寄付頂いた場合、所得税法により、領収書の領収日は、アジア学院に入金された日とさせていただきます。



#フードライフなひとコマ

食べものといのちを育む、アジア学院の日常

豚の出産 忍耐強く、一緒に

6月から8月にかけて豚の出産ラッシュで、5頭の母豚から合計58匹の仔豚が生まれましました。そんな出産のプロセスをご紹介します。まず予定日の2日前から2〜3時間おきに（もちろん夜中も）母豚の様子を見に行きます。出産が始まると、小休止を挟みながら数匹ずつ生まれていき、胎盤が出てくれば全員生まれた証拠です。ここまでで短くて4時間、長くて6時間かかります。さらに、初乳が大変重要なので、生後24時間は2時間おき、その後24時間は3時間おきに乳を飲ませます。世話をする私たちは、忍耐強く豚たちと一緒にいることが大切です。体力的にも大変な期間ですが、仔豚たちが生後3日経って健康であると感じると、嬉しい気持ちで一息つくのです。

文



ソー・マナー・シェイ
フードライフ課 農場



BULLETIN BOARD
事務局よりお知らせHarvest Thanksgiving Celebration
第53回

収穫感謝の日

10月18日(土) & 19日(日)

毎年恒例、豊かな収穫に感謝する

アジア学院最大のイベント!

多国籍の料理、多文化のステージや

体験コーナーで皆様をおもてなしします。

マイ食器の
持参にご協力
ください!「愛の種をまこう
平和な明日へ」

2025年度HTCのテーマ&ロゴ

Time Schedule

10:00 開場
10:15-11:15 収穫感謝礼拝
11:30-15:30 お食事、ステージ、
ゲームetc.

送迎バス

<行き> 9:45
那須塩原駅西口(バスロータリー)発

<帰り> 15:30, 16:30
アジア学院発 ~ 那須塩原駅行

駐車場 狩野公民館
(那須塩原市槻沢231)

※会場へは巡回バスをご利用いただけます。

ちょこっと
ファーム

10/18

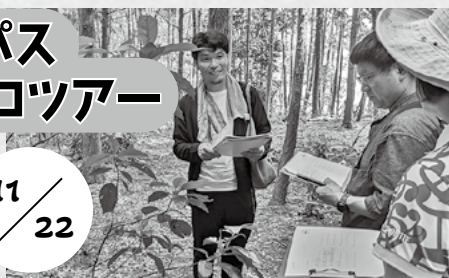
11/15

詳細・お申し込みはアジア学院ウェブサイトをご覧ください!

キャンパス
ミニエコツアー

9/27

11/22

USED
BOOK
MARKET

古本市

10月31日(金) ▶ 11月8日(土)

OPEN 11:00 - 16:00

※11/2(日)閉店

会場

那須セミナーハウス隣接 旧宣教師館
(那須セミナーハウスの隣の平屋建ての建物です)

全国から寄贈された文庫本、絵本、美術書などが100円〜。
ここだけの出会いをお楽しみください!

古本募集中!

アジア学院まで
お送りください。

手作り

インドカレー
& チャイ販売マイ食器の
持参にご協力
ください!

3日間 限定!

11/1(土)、11/3(祝日)、11/8(土)

*** 新職員紹介 ***

ティ・ティ・ウィン

'14卒、'24研究科生(ミャンマー)
FEAST(給食・食育)担当

ティ・ティは、2024年度研究科生
を経て、今年度は職員です。皆の好
みを考えた丁寧な料理と明るい笑顔
で、学院の食卓と学生の学びを支えています。



クリスマス献金に願いを託して

毎年クリスマスの時期に皆様をお願いしている特別献金は、
人々のために働くことを願う草の根のリーダーを今後も迎え入
れ、「仕えるリーダー」として育成するための重要な財源とな
ります。皆様の教会や学校で集めるクリスマス献金に、アジア
学院に対する皆様の願いと希望を託してください!

ご寄付の方法は通常の寄付と同様か、次号で掲載するクリス
マスキャンペーンのご案内からお願いいたします。

お礼状・領収書発行時期について

本年1月以降のご寄付のお礼状兼領収書は、原則として来年1月にまとめて発行いたします。

1月を待たずに領収書を必要とされる方は、通信欄またはsupport@ari.ac.jpにてその旨をお知らせください。